

シリーズ後藤新平人脈考⑬

木村 榮 ひさし

水沢緯度観測所の初代所長であり理学博士・天文学者であった木村榮氏と後藤新平との接点を紹介。全く異なる分野で、世界を相手に或いは地球規模の仕事をしてきた二人。お互いに敬意をもって接していることが窺えます。

現在の金沢市泉野町に生まれ、1歳で木村家の養子となる。漢学塾を営む養父民衛は榮の才を見込み遊ぶ間を惜しみ学問を教え込んだ。四高を首席で卒業後、帝国大学理科大学星学科に進学。1898(明治31)年、万国測地学協会総会で国際共同の緯度観測所を北緯39度08分上に6カ所設置が決定。日本の観測地点として岩手県の水沢(現奥州市)に設置された水沢緯度観測所(現国立天文台水沢 VLBI 観測所)に所長として真佐喜夫人と共に赴任。1902(明治35)年、中央局から水沢のデータ精度が他局の2分の1と指摘された木村はデータの再計算と天長儀分析調査を進め、緯度変化の変動に対し従来の変換式に新たな一項を加えることで観測結果に適合することを発見する[Z項発見]。王立天文学ゴールドメダル・第1回文化勲章を受章、1941(昭和16)年水沢緯度観測所退任、1943(昭和18)年9月26日持病の喘息の悪化により、東京世田谷の自宅で逝去。72歳。



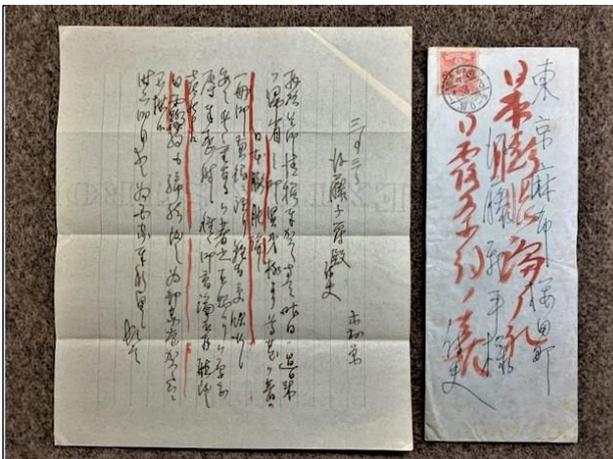
【1870年~1943年】



【後藤新平と木村榮】

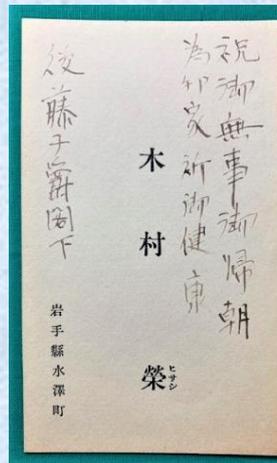
後藤新平は、郷里水沢を拠点とし世界的に活躍する天文学者の木村榮に自身の著作『日本膨張論』[1915(大正4)年初版]を贈っている。科学的政治家と称された新平の自然科学への探求心と、13歳年下ながら「千山」の号をして書に通じ、宝生流謡曲を普及、テニスや卓球を楽しみ、地元民と馴染み、学究の徒のあるべき態度や精神を「Z」の文字に遺した木村博士への敬意が窺える。

1937(昭和12)年6月の後藤新平旧宅保存工事完成祝賀で祝辞を述べる木村博士の姿が映像に残っている。《写真は、水沢駅での木村博士送別：1941(昭和16)年》

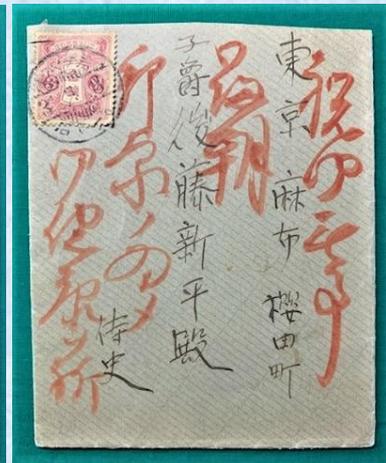


「『日本膨張論』を貰ったことに対する礼と日露条約締結は慶賀の至りであること。」

一九二五(大正一四)年三月三日付



「後藤新平露国より帰国。大任を果たし無事帰国のお祝い」



一九二八(昭和三)年二月

【後藤新平宛木村榮書翰】

【木村榮・真佐喜夫妻を囲む水沢婦人会の面々：(於水澤駒形神社)】

小野ほぜん夫人

(敬称略)



及川 梅代

伊藤 直

高野たま(長経夫人)

(吉祥学園)

安倍トシヨ

平山キヨ(長経長女)

油井長三母

【藤田写真館撮影】